

オランダ農業の競争力と農産物貿易

主事研究員 一瀬裕一郎

1 はじめに

2013年2月18日の第2回産業競争力会議で「世界の農業を目指すため、オランダをモデルに農業を強くする施策を検討すべき」との意見が出された。^(注1) 本稿では注目を集めるオランダ農業の競争力と農産物貿易^(注2)について紹介する。

2 オランダ農業の概況

オランダ農業は、国民1人あたりの土地資源の少なさ等に規定され、園芸や畜産等の土地節約、労働・資本集約型部門に特化した構造となった。主要産品は、菊等の花卉類、トマト等の野菜類、チーズ等の酪農製品、豚肉等の畜産品である。一方で、オランダは土地利用型の穀物をEU諸国から輸入している。EU共通市場の中央に位置し、面積と人口がともに小さい国というオランダ固有の条件が、労働・資本集約型部門に特化したオランダの農業構造を成立させた背景にある（「5 オランダ農業の競争力の背景」を参照）。

3 オランダの農産物貿易の特徴

オランダは世界第2位の農産物輸出大国であり、12年の輸出額は754億ユーロ（1ユーロ＝125円換算で約9兆円）である。

オランダの農産物輸出の特徴を把握するために、例として青果物の流通構造を第1表に

第1表 オランダの青果物の流通構造(2007年)

(単位 千トン、%)

	国内生産		輸入		合計	
	数量	割合	数量	割合	数量	割合
国内消費	917	20.9	1,100	24.7	2,017	22.8
輸出	2,973	67.8	3,227	72.5	6,200	70.2
食品加工業	496	11.3	123	2.8	619	7.0
合計	4,386	100.0	4,450	100.0	8,836	100.0

資料 宮部(2009)から作成

示した。以下の3点を確認できる。

第1に、輸入量が国内生産量をやや上回ることである。国内生産量は4,386千トンである一方、輸入量は4,450千トンである。なお、輸入された青果物の7割超が再輸出される。

第2に、輸出量の過半が再輸出ということである。輸出量6,200千トンのうち、国内で生産された青果物の輸出が2,973千トンである一方、輸入された青果物の再輸出は3,227千トンである。

第3に、国内消費量は、国内生産量、輸入量、輸出量より大幅に小さいことである。

つまり、オランダの青果物では、輸出向けの国内生産と、再輸出向けの輸入が多いことが特徴である。

農産物輸出が必ずしも国産農産物とは限らないこと、および国内消費を大幅に上回る国内生産や輸出入が行われていることは、青果物だけでなく花卉類や酪農製品等、オランダ農業の主要産品にも共通する特徴である。

また、オランダはカカオ豆や葉タバコ等の輸入原料を国内で加工し、最終製品を輸出する加工貿易や、冬期に野菜を南欧から輸入しドイツ等へ輸出する中継貿易も行っている。

4 主要な輸出先はEU諸国

オランダの農産物の主要輸出先は、EU諸国である(第2表)。全体の4分の1がドイツ向けであり、EU諸国向けが8割を超える。また、東欧を除く、世界の多くの地域でオランダの輸出シェアは90年代後半から低下している。^(注3)

5 オランダ農業の競争力の背景

オランダ農業が強い競争力を有する背景としては、①北海に面し、欧州の中央に位置するオランダの立地、②共通市場を形成してい

第2表 オランダの農産物貿易の相手国と貿易額
(2008年)

輸出先国	割合 (%)	輸出額 (10億ユーロ)	輸入先国	割合 (%)	輸入額 (10億ユーロ)
世界計	100.0	64.5	世界計	100.0	40.9
ドイツ	25.5	16.4	ドイツ	20.0	8.2
イギリス	11.0	7.1	ベルギー	13.2	5.4
ベルギー	10.7	6.9	フランス	9.3	3.8
フランス	9.9	6.4	イギリス	3.9	1.6
EU計	81.4	52.6	EU計	60.8	24.8
アメリカ	2.7	1.7	ブラジル	6.7	2.7
ロシア	2.3	1.5	アルゼンチン	3.5	1.4
スイス	1.1	0.7	アメリカ	3.1	1.3
日本	0.8	0.5	マレーシア	2.6	1.1
非EU計	18.6	11.8	非EU計	39.2	16.1

資料 オランダ経済・農業・イノベーション省 Fact and Figures 2010 から作成

る裕福なEU諸国、③効率的な農業経営と高収益部門への特化、④不断のイノベーションと関連産業のクラスター、⑤農業者等の協働体制を支える「ポルダー・モデル」の5点が挙げられる(一瀬(2013))。

①は、ロッテルダム港を核に、17世紀以降オランダを世界の貿易センターとならしめた。②は、地続きでアクセスが容易な農産物の売り先と穀物の調達先をオランダに提供した。また、EU共通市場内では国境措置に阻まれることなく貿易を行えることも追い風となった。③は、規模拡大、作物の絞り込み、機械化等を通じて生産費を削減し、農産物の価格面での競争力を高めた。④は、EER(Education、Extension、Research) triptychと呼ばれる世界的に評価の

高いオランダ農業の教育・普及・研究システムが新品種の育種や新技術の普及等で大きな役割を果たしてきた。また、小さな国土に稠密に存在する関連産業クラスターが、農産物の生産から流通そして小売に至るフードシステムのあらゆる段階で、最良の商品・サービスを提供している。⑤は、利害関係者間で丁寧な合意形成を行うことを可能にし、その背景には強固な協働体制を構築するという干拓・治水の歴史に培われたオランダの文化が土台にある。

6 おわりに

日本が「攻めの農政」を掲げて国内農業を振興するには、農業の競争力強化が必要となる。その際に、研究開発の仕組みや関係者の協働体制等について、日本がオランダから学べることは少なくないだろう。

とはいえ、日本の農業を規定する条件はオランダと異なり、日本がオランダの歴史やEU共通市場を模倣することはできない。また人口、国土面積ともオランダの約9倍である日本はその規模のため、食料安全保障の観点からも、市場確保の観点からも、オランダのような園芸等の労働・資本集約型農業への特化は困難であり、土地利用型農業を維持する必要がある。

<主要参考文献>

- ・ING Economics Department (2011) *Dutch trade: more European than global*
- ・首相官邸(2013a)「第2回産業競争力会議後の甘利大臣記者会見要旨」
- ・首相官邸(2013b)「日本の農業をオールジャパンでより強くし、成長輸出産業に育成しよう！」
- ・首相官邸(2013c)「第2回産業競争力会議議事要旨」
- ・一瀬裕一郎(2013)「オランダ農業が有する競争力とその背景」農林水産省『平成24年度海外農業情報調査分析事業(欧州)報告書』(近日公表予定)
- ・宮部和幸(2009)「オランダの青果物流通システムの変化--1990年代後半以降の青果物流通の激変を中心として」『野菜情報』
- ・宮部和幸(2011)「1990年代以降のオランダ農業構造の変化と特質」『食品経済研究』第39号

(いちのせ ゆういちろう)

(注1)首相官邸(2013a)参照。民間議員が提出した資料の首相官邸(2013b)では、園芸農業を輸出産業にするため、「オランダをベンチマークし、政策を実施」することを提案している。また、首相官邸(2013c)では、複数の民間議員がオランダに言及したことを確認できる。

(注2)本稿は紙幅の都合で詳細な分析はできないが、『農林金融』13年7月号に貿易統計の分析等を行ったオランダ農業と農産物貿易についてのレポートを掲載する予定である。

(注3)ING Economics Department(2011)によれば、農業、化学、技術産業の産品で、東欧を除く世界の多くの地域において、輸出に占めるオランダのシェアが低下した。しかし、低下してなお世界の農産物輸出に占めるオランダのシェアは5%台(06~10年平均)を維持している。